



奈良の丘だより

横浜市立奈良の丘小学校

学校教育目標

7月号

笑顔いっぱい チャレンジいっぱい奈良の丘

<http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/naranooka>

まっすぐな思い

校長 浅川聡子

「よこはま子ども国際平和プログラム」の一環として行われる横浜国際スピーチコンテスト。世界平和の実現に向け、自分たちができることについて、6年生の子どもたち一人ひとりが真剣に考え、スピーチしました。今を生きる子どもたちは、何を見て、どのように感じ、考えているのか・・・校内で最終審査に残った児童の主張をお伝えしたいと思います。（紙面の関係で、要約させていただきました。）

板山菜由さんは、お姉さんがヘルプカードによって助けられた経験や、ヘルプカードをつけたお年寄りがたくさんの荷物を運んでいる時に、自分が声をかけることができなかった後悔から、困っている人に声をかけられる大人になりたいという思いをもったそうです。障害や年齢のせいで生活に不便を感じたりするそんな社会の不平等を、私たちが手を差し伸べることでサポートしたい。あの人は今何か困っているのかなという想像力を大事にし、みんなが声を掛け合い、お互いを認め合える未来になってほしいという思いを述べました。

坂本梨紗さんは、自身が命に関わる病気で入院し、治療によって元気に退院することができたという経験をしています。しかし、世界には治療を受けることができず、風邪で命を落としてしまう子ども達がいることを知り、医療の発展に必要なお金を集めるために、募金や古着の寄付など、自分達でできる小さな支援から一緒に始めてみませんかと呼びかけました。

鈴木碧さんは、周りの人と自分では色の見え方が違うことに気づき、これまでの自分の接し方を振り返ったそうです。そして、身近なところから工夫を重ねて接したことで困ることがほとんどなくなっていったという経験をしました。世の中では、いろいろな色の見え方をする人たちが、さまざまな職業の第一線で活躍しています。みんなが違いを認め合い、お互いに助け合ったり工夫しあったりする優しい社会になったらいいなと願いを込めて伝えました。

関孝仁さんは、お祖母さまから、曾祖父さまが海軍兵隊学校の卒業が終戦より早ければ、戦場に行かなければならなかったと聞き、安心すると同時に、それより前の人々は戦場に行ったのだと思い複雑な気持ちになったそうです。また、激しい戦争の中生きて返ってこれたのに「恥ずかしながら日本に帰ってきました。」と喜ばない姿をテレビで見たりする中で、改めて、昔の人から尊い命がつながってきたことで、今の自分や友達、家族がいるのだと思ったそうです。そして命が奪われてしまうような争いをなくしていくために、差別をなくし、対等に話したり、現状に関心をもっていたりすることの大切さを、自分から呼びかけたいと強い気持ちを訴えました。

横溝瑛太さんは、小学校4年生まで通っていたインターナショナルスクールで、世界160カ国以上の国や地域の人たちの文化や考え方に触れてきた経験を話しました。ウクライナ出身の先生からは、家族で伝統料理を囲んで食べる大切な文化や、家族で食事をするという普通の生活が戦争によってできなくなってしまったことを聞き、フィリピンやスリランカ、パキスタン出身の友達からは、電気が通っていない地域があることや、水を汲むために遠くまで歩かなければならない子どもがいることを聞いたそうです。家族で食事をするという普通のことが実は幸せなことであることや、日本では当たり前のことができない国が世界にはあることを知り、SDGsの17番の目標である「パートナーシップで目標を達成しよう」とあるように、相手の国や文化を知り、違いを認め合いながら世界の人たちと助け合える社会にしていきたいと自分の思いを表明しました。

子どもたちは未来を信じています。問題は解決することができると。子どもたちのまっすぐな思いが心に突き刺さってきます。

この思いを前に、大人になった私は、いつの間にか、感受性を鈍らせ、できない理由を数えていたかもしれないと恥ずかしくなりました。

困難から目をそらさず、まっすぐな思いで向き合う大人の姿を子どもたちには見せていきたいと強く思いました。



梅田さん いつもありがとうございます
(奈良3丁目自治会長)

昨年度、PTA会長から「子ども達の登校を見守ってくださる方をご紹介いただけませんか。」と依頼され、「人をお願いするには、まず自分が体験してみないと」と思い、交差点に立ち始めてくださったそうです。あれから1年、ほぼ毎日、交差点に立ってくださっています。

最初は、「おはよう」と声をかけても、じっと見てくるだけだったり、さっと通り過ぎたりしていた子ども達も、日数を重ねるごとに挨拶を返してくれるようになり、今では自分から声をかけてくれるようになったそうです。

梅田さんは「子ども達の存在が、自分の生きがいになっているよ。」と目を細めて教えてくださいました。

このようなお気持ちで子ども達を見守ってくださる梅田さんには深く感謝の思いをもつと共に、改めて、子どもは地域の宝、いろいろな方と関わり合いながら育っていくのだと思いました。

